

一步踏み出す勇氣

広島県立広島中央特別支援学校

中学部第2学年 濱田 美遙

(原文点字のため墨字訳)

一步踏み出す勇氣

広島中央特別支援学校 中学部二年 濱田 美逢

みなさん、見えない自分が一人で外を歩くことを想像してみてください。

「えっ？ 怖いし嫌だなあ。」

これが私の歩行指導に対する第一印象でした。中二の私はまだ一人で外を歩いたことがありません。生まれつき障害があり、明暗や色ぐらいしかわかりません。だから私は三歳から盲学校に通っています。

小学三年生で歩行指導が始まり、白杖を使う練習も始めました。白杖は視覚障害者にとって第二の目となってくれらるとも大切なものです。五年生の時に自力通学の練習が始まるのに合わせて、初めて自分の白杖を買ってもらいました。小さい頃から白杖を持つことに慣れていたので、とても嬉しかったけれど、一人で外を歩くことはとても難しく、怖くて不安な気持ちの方が何倍も大きかったです。最初は学校から家に帰る自力下校の指導から始まりました。見えないから、車、信号、歩道を走る自転車、人の声、ザワザワした街の中でさまざまな音に耳を澄まさなくてはいけません。家に着くまで気を緩められない緊張の連続で、始めたばかりの頃は家に帰ったら宿題がでないくらいクタクタになりました。学校から家まで乗り物を二回乗り継ぐ約一時間の道のりを、やっと一人でできるようになったのは六年生の冬でした。

中学一年の秋、登校の練習が始まり、バスに乗った時のことです。

「空いている席はありますか？」

と尋ねた私に、運転手さんから返ってきた言葉は

「え？ そこ空いとるやん。」

でした。運転手さんの言った「そこ」がどこなのか、見えない私にはわかりません。

「そこってどこ？ なんで？ なんで私がそんな対応をされなきゃいけないの？」

私は腹が立ち、そして悔しくてたまりませんでした。だけど私は何も言い返せませんでした。白杖の先で通路を探り、なんとか空いている席に座ることができましたが、

私はただ下を向くしかできず、いますぐその場から逃げ出したかったです。

運転手さんは、私の視覚障害に気づいていなかったのかもしれない。どんな配慮が必要か知らなかったのかもしれない。だからこのできごとの後、教頭先生と歩行指導の先生、視覚障害のある先生の三人の先生方がバス会社を尋ねてくださいました。視覚障害者が必要とするサポートについて具体的に話をしてくださいました。また、クリアファイルを四枚重ねて、「これくらいの見え方です。」とバス会社の方の目にかざしてみてもらったことで、私の見え方や配慮の必要性を実感してもらえたそうです。

次の練習の日の朝、先生方がバス会社に行ってくださいましたことは知っていたものの、バスを待つ間の私の頭の中はマイナスなことではいっぱいでした。大げさかもしれませんが、この時私は小学五年生から練習を積み上げてきた歩行への自信を失いかけていました。ああ、もう練習なんかしたくない。また冷たい言葉を言われたら嫌だなあ……。不安と緊張で胸が張り裂けそうでした。

とうとうバスがやってきました。これまでの練習の中で一番の勇気を振り絞って、「空いている席はありますか？」

と尋ねた私に、運転手さんは、

「すぐ横が空いていますよ。」

と優しい声でわかりやすく教えてくださいました。この一言で私の緊張は一気にほぐれました。

「ああ、よかった。」「ありがとうございます。」「そう心から思いました。」

この日を境に運転手さんの対応は変わり、安心してバスが利用できるようになりました。先生方やバス会社の方々に感謝しています。

この経験を通して私は、視覚障害者への対応について知らない人がたくさんいることを知りました。今まで、白杖を使って歩くのは街でとても目立つと思っていただけ、周りにいる方々がいつでも私の視覚障害に気付いてくれるわけではないことわかりました。声を出すのは勇気が必要だけど、黙っているのは私が困っていることもわからぬ。今回は先生方が対応してくださいましたが、今後困ったときは自分で助けを求めよう、そう心に決めました。

そんなある日、登校練習でバスに乗っていたとき、次のバス停で降りようと押しボタンを押しましたが、鳴りませんでした。何度か繰り返し押ししてみました。鳴りません。「どうしよう……。」外の景色はわかりませんが、降りたいバス停はきつともうすぐそこだと思いました。

「降ります!!」

とっさに私は運転手さんに聞こえるように大きな声を出していました。すると運転手さんから

「わかりました。」

という声が返ってきました。自分から助けを求めることが初めてできました。他人からしてみればちっぽけなできごとかもしれませんが、私にとってはとても大きな経験でした。勇気を出して声を上げたことで、声をあげれば伝わるということを実感でき、自信もつきました。

視覚に障害を持つ私が一人で外を歩くということは、何度やってもやっぱりとても難しいです。まだまだ不安だらけですが、練習を繰り返すうちに、困ったときは運転手さんや周りのお客さんに自分から声を出し、少しずつですが助けを求めることができるようになってきました。私が声を出すのに勇気が必要なように、私の声に足を止めてくださる方にもきつと勇気が必要だと思います。だからこそ、きちんとありがとうも伝えていきたいです。

私には将来盲学校の先生になりたいという夢があります。社会へ出るまでにはこれからたくさん経験を積み重ね、失敗や困難な壁にぶつかると思っています。けれど、諦めず勇気をもって一歩踏み出すことで自分の世界が広がり、時には周りの方の力を借りることで、どんな壁も乗り越えていけると思っています。だから私はこれからも夢に向かって勇気をもって一歩ずつ進み続けます。

<指導者の言葉>

この作品は、特別活動の単元「校内弁論大会予選に向けて」において、「原稿作成を通して自分を見つめ直すとともに、自他の良さに気付くことができる。」ことを目標に作成しました。

本生徒は、中学部弁論大会を通過しながらも校内弁論大会を通過することができなかった、自身の原稿を見直し、作品コンクールに応募するために、夏休み中さらに推敲を重ねました。当初は、視覚障害がある中での歩行の大変さと学校の対応にかなりの行を割いており、自分の「勇気」がはっきり見えてこなかったため、まず一番伝えたいことは何かを再確認しました。その上で、国語科の随想の学習や「根拠の適切さを考えて書こう」「表現を工夫して書こう」などの単元で学習したことを思い出し、主に次の3点を再考するように促しました。

- ① 伝えたいことと具体的事例・できごととの関係を見直し、記述内容を整理する。
- ② 事例・できごとの意味付けを行うことで結論につなげ、自分の変容も明らかにする。
- ③ 実際のやりとりや心の声などを入れ、読者に伝わる表現を工夫する。

生徒は、アドバイスをもとに、どの部分を割愛し、どの部分に比重を置いて書けばよいか、どうすれば自分の気持ちが伝わるかを考えて、文章を整理したり加筆したりしていきました。その過程を経て、自分の心の動きも素直に表現することができ、社会に出ていく怖さに打ち勝とうとしている姿も伝わってくるようになりました。

この作文は、視覚障害による困難に立ち向かう自分の姿を描くことを通して、皆が背中を押したくなる、皆にも前向きな気持ちをくれる作文になったと言えます。